

高等教育機関の学問的生産性に関する社会学的研究（1） — 学術研究改善基礎調査の報告 —

- 有本 章（広島大学・大学教育研究センター）
○大膳 司（琉球大学法文学部）
伊藤彰浩（広島大学・大学教育研究センター）
○相原総一郎（広島大学・大学教育研究センター）
阿曾沼明裕（広島大学大学院）

研究の目的と方法

本研究のねらいは、わが国の高等教育機関における学術研究活動に焦点をあてて、その実態を実証的に明らかにすることにある。具体的には、科学社会学の立場から、学術研究の結社としての学界、研究機関としての大学、研究者としての大学教員がどのような特性をもち、いかなる問題をかかえているのかを基礎調査によって検討することにある。すでに学問的生産性の観点から、学界の規範構造、社会構造、報賞体系などに関する国際比較研究に取り組んできたが、その成果の一部は、昨年および一昨年と、「主要機関の学問的生産性の条件に関する国際比較研究」(1)(2)によって報告してきた。今回は日本の高等教育機関に研究の対象をしぼって、これまでに得られた成果を踏まえつつ新たに実施した全国調査について報告する。

今回の調査は、昭和63年5月1日の時点で、全国の国・公・私立の4年制大学および短期大学、高等専門学校に在職する理事長、学長（校長）、学部（学科）長（4年制大学は学部長、短期大学は学科長）、教授、助教授、講師を対象に、層化抽出法をもちいて選ばれた2,035人に対して実施した。調査票『学術研究の改善に関する基礎調査』は平成元年11月に郵送し、平成2年1月と2月にそれぞれ催促状を送付の上、3月に回収を終了した。最終の回収状況は表に示されているとおりである。回収率は全体で59.0%であった。

本報告では、この全国調査の結果から、日本の高等教育機関での研究活動の実態を1.学界（学会）、2.大学（学科）、3.研究者という3つの分析単位から明らかにしたい。まず学界については、国

際学界における日本の学界の地位や学界への加入状況、学術専門雑誌の発行状況などを明らかにする。つぎに学科については、教員の所属学科における研究と教育の関係、日本の高等教育機関のヒエラルヒーにおける学術活動レベルの地位などを明らかにする。最後に研究者については、大学教員の生きがいと時間配分、学問的生産性と年齢、学問的生産性による学者の類型化などを報告する。

（有本 章）

調査票の発送及び回収状況

単位：数

理事・学長	発送数	回収数	回収率
4年制大学理事	71	32	45.1
短期大学理事	95	52	54.7
高等専門学校理事	1	0	0.0
4年制大学学長	98	65	66.3
短期大学学長	114	59	51.8
高等専門学校校長	13	11	84.6
小計	392	219	55.9
学部長以下			
4年制大学学部長	249	157	63.1
4年制大学教授	410	223	54.4
4年制大学助教授	276	146	52.9
4年制大学講師	155	92	59.4
短期大学学科長	289	197	68.2
短期大学教授	70	37	52.9
短期大学助教授	54	29	53.7
短期大学講師	44	22	50.0
高等専門学校学科長	60	50	83.3
高等専門学校教授	15	14	93.3
高等専門学校助教授	15	12	80.0
高等専門学校講師	6	3	50.0
小計	1,643	982	59.8
総計	2,035	1,201	59.0

I. 研究活動の環境—その実態と問題点

ここでは、個々の研究者の研究活動を取り巻く環境の実態と問題点を、国際学界、国内学界、学科の3つのレベルから検討した。

1. 国際学界における日本の学界の位置

①研究者の専門分野から見た学術活動の盛んな国の順位をたずね、上位5位までの国を回答してもらった。

各国の順位を平均した結果、表1のようになった(順位のない場合は、6位として計算した)。

アメリカ合衆国の平均順位が1.59で第1位、第2位にイギリスの3.18、続いて西ドイツの3.57で、第4位に日本が位置しているという結果となった。

一昨年に、有本が行ったアメリカ合衆国の研究大学の学科長へのアンケート調査においても同様の質問を用いた。その結果とこの度の結果を比べると、上位3位までは同じ結果となっているが、第4位の日本と第5位のフランスの順位は、逆転しており、第4位フランス、第5位日本となっている。この度の調査は、日本の学術研究の向上を示す一つの傾向を裏書きすると介されるが、同時に日本人を対象者としているため自国中心主義(ethnocentrism)が働いているとも考えられる。

いずれにせよ、経済大国日本の学術研究活動は、国際学界のレベルにおいては、まだ4~5位のところに位置していると認識されていることになる。

②そこで、日本の学術研究を改善する必要があるとするならば、どの点を改善すべきであるかを

表1 学術活動の盛んな国

	盛んな国	順位	平均
1	アメリカ合衆国	1	1.59
2	イギリス	2	3.18
3	西ドイツ	3	3.57
4	日本	4	4.22
5	フランス	5	4.48
6	ソビエト連邦	6	5.76
7	カナダ	7	5.87
8	スウェーデン	8	5.91
9	中国	9	5.92
10	オーストリア	10	5.95
11	オーストラリア	11	5.95
12	イタリア	12	5.95
13	13

大学
教員
数

たずね、15個の選択肢から5つ選んで、1~5位の順位を付してもらうことにした。

選択肢ごとに順位を平均した(順位のない場合は、6位とみなして計算した)。

順位の高い(改善を要すると思われる)5つの選択肢は、「国の学術政策」「創造力を育成する文化・風土」「大学院教育」「科学研究費の配分」「大学入試」であった。

逆に、順位の低い(あまり改善を要しないと思われる)3つの選択肢は、「学会の運営」「学術活動への報賞制度」「一般教育」であった。

2. 学界と学術専門誌における活動状況

学会の活動状況について

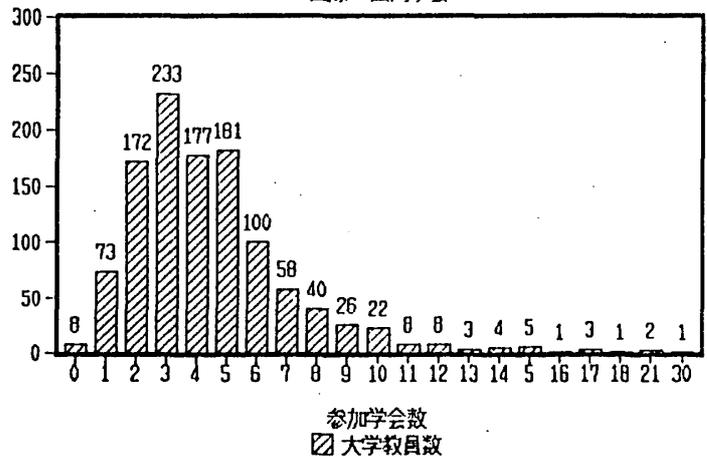
③研究者の所属している学会の数を尋ねた。その結果が、図1である。

参加学会数が0の場合から、30種類の学会に参加している場合までの広がり確認された。3種類の学会に参加している大学教員がもっとも多く、平均を計算すると、大学教員1人当たり4.46種類の学会に所属している結果となった。

④学会活動の推進にとって重要な事項7種類を示し、「大変良好」から「良好でない」までの5段階で回答してもらった。

「大変良好」と「良好」を選択した大学教員の多かった項目は、「1. 学会誌の定期的発行」と「2. 発表される研究の量」であった。逆に、「

図1 参加学会数別大学教員数の分布
(国際・国内学会)



あまり良好でない」と「良好でない」を選択した大学教員の多かった項目は、「7. 海外の学会との交流」と「4. 新しい学会員の加入」であった。学術専門誌の状況について

⑤学術専門誌について、1年間の発行回数を尋ねた。

年間12回発行されている、という回答が最も多くなっていた。年間平均発行回数を計算すると7.19回であった。

⑥学術専門誌の質の向上にとって重要な6つの項目について、「大変良好」から「良好でない」までの5段階で回答してもらった。

「大変良好」と「良好」を選択した大学教員の多かった項目は、「1. レフェリーによる審査の公正度」と「3. 掲載される論文の質」であった。逆に、「あまり良好でない」と「良好でない」を選択した大学教員の多かった項目は、「6. 国際学会への貢献度」と「5. 海外への研究者による論文の掲載」であった。

表2 教育と研究の関係からみた学科のタイプ

学科のタイプ		回答数	(%)
1	とりわけ研究を重視する学科	53	4.48%
2	どちらかといえば研究を重視する学科	128	10.81%
3	研究と教育をほぼ等しく重視する学科	456	38.51%
4	どちらかといえば教育を重視する学科	365	30.83%
5	とりわけ教育を重視する学科	142	11.99%
	NA	40	3.38%
計		1184	

表3 国内における学科の位置

学科の位置		回答数	(%)
1	きわめて上位にある	60	5.07%
2	かなり上位にある	214	18.07%
3	ほぼ中位にある	458	38.68%
4	どちらかといえば下位にある	263	22.21%
5	かなり下位にある	135	11.40%
	NA	54	4.56%
計		1184	

表4 今後10年間の研究活動状況

研究活動状況		回答数	(%)
1	活発になる	499	42.15%
2	変わらない	540	45.61%
3	どちらかといえば停滞する	76	6.42%
	NA	69	5.83%
計		1184	

3. 学科の実態と問題点

ここで言う「学科」とは、人事権と予算の配分権をもった大学自治を構成する単位で、講座や研究室よりも大きく、学部よりも小さい研究単位をさしている。

⑦回答者の大学教員の所属学科は、教育と研究の関係からみて、どのようなタイプとなるか尋ねた。その結果が表2である。

「3 研究と教育をほぼ等しく重視する学科」を選択した大学教員が最も多く456人(38.5%)であった。続いて多くの大学教員が選択した関係は、「4 どちらかといえば教育を重視する学科」で365人(30.8%)であった。教育と研究の関係からみた学科の各タイプの分布は、「教育を重視する学科」の割合が少し多くなっているものの、ほぼ「3 研究と教育をほぼ等しく重視する学科」を中心として分布している。

⑧所属学科の研究活動が、全国の大学における同様の学科と比べてどのような位置にあるかを尋ねた。その結果が表3である。

「3 ほぼ中位にある」を選択した教員が最も多く、458人(38.7%)であった。学科の位置関係の分布は、「ほぼ中位」を中心として分布している。

⑨今後10年間に、あなたの所属学科の研究活動はさらに活発になると思うか、尋ねた。その結果は表4の通りである。

「1 活発になる」を選択した教員は499人(42.1%)となっている。逆に「どちらかといえば停滞する」を選択した教員は76人(6.4%)にすぎなかった。

(大膳 司)

II. 研究活動の実態と学問的生産性

ここでは高等教育機関に在職する教員の研究者としての側面について、研究活動の実態と学問的生産性に焦点をあてて検討する。検討する項目は、1. 大学教員の生きがいと時間配分、2. 学問的生産性と年齢、3. 学問的生産性による学者の類型化である。以下には、これらの項目について素集計表（理事長・学長を含む）の結果を報告する。

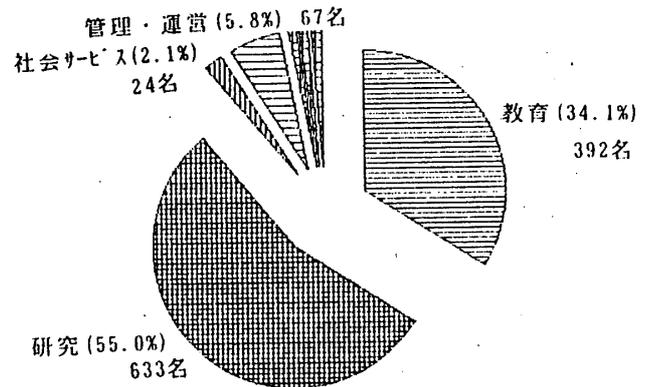
1. 大学教員の生きがいと時間配分

わが国の高等教育機関に在職する教員は、何にもっとも生きがいをもって仕事を遂行しているであろうか。大学の教員の仕事として通常よく挙げられる研究、教育、管理・運営、社会サービスの4項目に、学会の仕事、演奏会・個展などを加えた7項目について、どれにもっとも生きがいを感じているかを調査した。素集計から得られた結果を図1に示したが、図に明らかなように、大学教員の過半数は研究にもっとも生きがいをもっている（55.0%：633名）。

一方、仕事の時間配分についてはどうか。表1では、大学教員に対して研究、授業、管理運営、社会サービスのそれぞれについて1週間あたりの活動の時間配分を尋ねた結果を示した。最頻値をみていくならば、日本の高等教育機関では、研究には20時間/週、授業には10時間/週、管理運営には10時間/週、社会サービスには2時間/週を費やす教員がもっとも多くなっている。したがって、大学教員は研究にもっとも時間を費やしていることがわかる。

以上から、日本の高等教育機関に在職する教員の多くは研究を生きがいとし、1週間当り20時間を研究に費やしていることがわかる。しかし、これらの事実は素集計から得られたものであり、もしこれら大学教員の生きがいと時間配分を個々の研究者の年齢や職階、研究者が専攻する学問分野、あるいは研究者が所属する学科や大学の威信的地位ごとにみていくならば、また異なった事実

図1 高等教育機関に在職する教員の生きがい



有効回答数 1151票

表1 大学教員の1週間当り時間配分（最頻値）

	平均時間/週
研究	20時間
授業	10時間
管理・運営	10時間
社会サービス	2時間

が得られるであろう。発表では、こうした特性ごとの差異に注目したい。

2. 学問的生産性と年齢

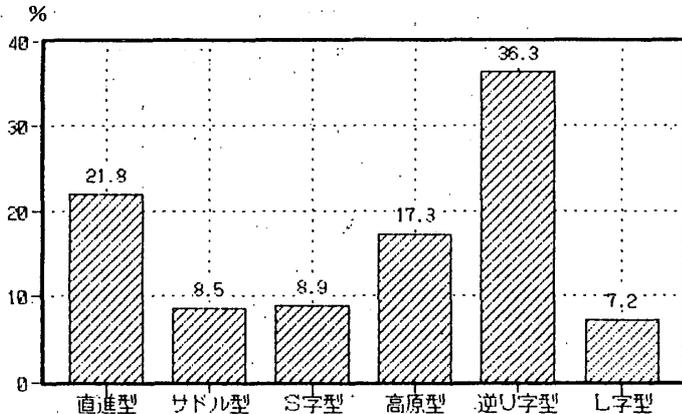
学問的生産性と年齢との関係は、科学社会学の分野で検討されてきている。先行研究をいくつかみるならば、たとえば学問分野については、業績生産の頂点が青年期にある分野、壮年期にある分野、高齢期にある分野、高原状態を示す分野に類型化されている、といえよう。また個人差をみるならば、城壁型（若くして業績を上げるが、その後は振るわない）、高原型（早くから晩年まで業績を上げる）、晩成型（晩年になって業績を上げる）、漸次上昇型（若い頃から徐々に業績を上げる）の4類型が挙げられている。

本調査では、A. 直進型（勤務年数と共に業績も上昇する）、B. サドル型（35歳前後と60

歳前後に頂点がある)、C. S字型(35歳前後に頂点があり停滞した後に再上昇する)、D. 高原型(30歳前後の水準が継続する)、E. 逆U字型(40歳代に頂点がある)、F. L字型(30歳前後に頂点があり下降する)の6類型を設定して、回答者の個々の教員はそのいずれに属するかを自己選択してもらった。素集計の結果から、大学教員全体のパターンを図2に示したが、有効回答971人のうち、直進型は21.8%、サドル型は8.5%、S字型は8.9%、高原型は17.3%、逆U字型は36.3%、L字型は7.2%となっている。

図から、逆U字型(40歳代に頂点がある)がもっとも多く選ばれていることがわかる。しかし、直進型や高原型も多く選ばれている。それでは、これらの類型は、大学教員の専攻分野やその他の特性によって異なるであろうか。この点に注目して発表したい。

図2 学問的生産性と年齢



有効回答数 971票

3. 学問的生産性による学者の類型化

学問的生産性による学者の類型化も、科学社会学の分野で検討されてきている。たとえば発表物の量と質から量も質も多い「多産型」、量は多いが質の低い「大量生産型」、量は少ないが質の高い「完全主義型」、そして「沈黙型」の4類型が挙げられている。また研究の能力と業績から、有為有能型(実力も業績もある)、無為有能型(実力はあるが業績はない)、有為無能(実力はない)

表2 学問的生産性による学者の類型(最頻値)

類型	最頻値
多産型(多量高質)	10%
大量生産型(多量低質)	30%
完全主義型(低量高質)	30%
沈黙型(低量低質)	20%

が業績はある)、無為無能(実力も業績もない)の4類型も挙げられている。

本調査の結果を専攻分野での類型化について表2に示している。最頻値をみるならば、多産型は10%、大量生産型は30%、完全主義型は30%、沈黙型は20%となっている。それでは、専攻分野ごとにみていくならば、これらの数値はどのように変化するであろうか。また、大学教員の年齢や職階によって類型の比率は変化するであろうか。こうしたことに注目して発表したい。

(相原総一郎)

以上、研究結果の概要を示した。詳しくは発表当日に資料を配布する予定。なお、本報告は1989-1991年度文部省科学研究費補助金『高等教育機関における学問的生産性の規定条件に関する比較社会学的研究』(代表者、有本章)の研究成果の一部である。